

聖書箇所：ルカの福音書 4章 31～44節

説教題：権威と力に満ちた方

1 礼拝の起源

私たちが今、毎週日曜日の朝、このように一つところに集まって神を礼拝しています。なぜ日曜日なのでしょう。単純なようですが、実は意外に深い問題です。

一週間のうちある特定の日を特別な日と考える、その起源はモーセの十戒にまでさかのぼります。十戒の四番目に「安息日を覚えて、これを聖なる日とせよ」とあります。意外なことですが、安息日に礼拝しなさいとは書かれていません。過越に祭りのように特別な礼拝は決められてはいましたが、安息日に会堂と呼ばれる所に集まって礼拝することはなかったようです。そのようになったのはずっと後のことだそうです。

イエスは、カペナウムの町に移り、安息日ごとに人々を教えておられた、ここに書かれています。私たちが今、安息日に礼拝をささげるのはなぜか。イエス・キリストが、そのようにされたから。イエスを模範として私たちは今、礼拝をささげている。そのように言うことができます。

でもなぜ日曜日なのでしょう。実は旧約の時代、金曜日の日没から土曜日の日没までが安息日と呼ばれていました。それがなぜ土曜日から日曜日になったのでしょうか。イエス・キリストが墓からよみがえられたのは何曜日でしたか。日曜日です。弟子たちは、イエスのよみがえりを覚えて、日曜日を新しい安息日とし、この日に礼拝を持つようになりました。それ以来、私たちは使徒たちにな

らって日曜日を安息日と定め、この日に礼拝をささげてきております。

2 安息日の会堂で

(1) 悪霊を追い出す

今日の箇所は、安息日に何か起きたのか、そこから始まっています。

イエスが会堂で教えているとき、悪霊につかれた人が突然叫び出しました。「ああ、ナザレ人のイエス。いったい私たちに何をしようというのでしょうか。あなたは私たちを滅ぼしに来たのでしょうか。私はあなたをどなたか知っています。神の聖者です。」

どうして悪霊が突然にこんなことを叫び出したのでしょうか。黙っていれば、もしかして悪霊は無事でいたかも知れないのです。それなのに、悪霊は自分から身分を明かししてしまい、その結果追い出されてしまうのです。なぜ黙っていることができなかつたのか。変な言い方かも知れませんが、悪霊は自分が何者であるのかをよくわきまえています。自分が汚れていることを知っています。また同時に、イエスが神の聖者であることも知っている。聖書によれば、聖い神に触れた者はだれであれ例外なく死ぬと言われています。ですから、悪霊はいのちの危険を感じ、慌てふためいて叫びだした。それが真相でしょう。

イエスは悪霊に対し、「黙れ。その人から出て行け」と言ってしかりつけます。みことばのとおり、悪霊はものを言うことができ

なくなり、その人を投げ倒して出て行きました。

(2) 人々の驚き

会堂の中にいた人たちは、この光景を目撃し、驚きました。「今のおことばはどうだ。権威と力とでお命じになったので、汚れた霊でも出て行ったのだ。」

福音書を見ると、イエスの時代、悪霊につかれて苦しんでいた人たちが沢山いたことがうかがえます。もちろん、人々は悪霊を追い出そうと努力をしていたでしょう。でも成功することは希でした。成功したとしてもそれは簡単なことではない。ところが今、人々が目にした光景は何ですか。イエスはことばを語っただけなのです。彼らは口々にこう言いました。「今のおことばはどうだ。権威と力とでお命じになったので、汚れた霊でも出て行ったのだ。」人々が驚いたのは、悪霊が出て行ったからではありません。ただ口で語っただけでそのようになった。その事に驚きました。イエスが語る権威と力とは何か。その事はまた後で考えたいと思います。

イエスは安息日に、会堂で、悪霊を追い出された。このことをちょっと覚えていただきたいと思います。

3 日が暮れて会堂の外で

(1) 会堂を出て

次に見たいのは、この後イエスはどこに行かれたかということです。38節。「イエスは立ち上がって会堂を出て、シモンの家に入られた。」シモンとはペテロの本名です。皆さんはこの箇所を読んでもどう考えるでしょう。おそらくこう思うでしょう。ルカは、イエスがほかの場所に移ったという情報を伝えるた

めに、このように書いた。それ以上の意味はない。

いつも言いますが、聖書にはむだなことばは一つもありません。すべてのことばは必要があつて書かれています。この箇所もそうであるはず。「礼拝の時間が終わったので、会堂を出ました。是非来てくださいとお願いされたので、シモンの家に行かれました。」そういうことではありません。もっと大切な意味があるのです。それは何か。これから見ていきます。

先ほども触れたように、この日は安息日でした。安息日の規定は、神が定められた大切な戒めの一つです。イエスが会堂を出られたのはなぜか、そのことを考えるためには安息日の意味をもう一度確認する必要があります。出エジプト記20章8～11節をお読みします。

「安息日を覚えて、これを聖なる日とせよ。六日間、働いて、あなたのすべての仕事をしなければならぬ。しかし七日目は、あなたの神、主の安息である。あなたはどんな仕事もしてはならない。—あなたも、あなたの息子、娘、それにあなたの男奴隷や女奴隷、家畜、また、あなたの町囲みの中にいる在留異国人も—それは主が六日のうちに、天と地と海、またそれらの中にいるすべてのものを造り、七日目に休まれたからである。それゆえ、主は安息日を祝福し、これを聖なるものと宣言された。」(出エジ20章8～11節)

「○○せよ」と言われるとどうしても上から下に向かって強く命令されているように聞こえます。私はへそ曲がりですから、こんなことを聞くと、すぐに「いやだ」と反発したくなります。なんだか窮屈なところに押し込められ、不自由になるような感じがして、

逃げ出したいくなります。でも聖書は決して私
たちを拘束したり、不自由にさせるために書
かれているはずはない。必ず、私たちを自由
にするために書かれていると信じるなら、こ
の安息日の規定だって、本来は私たちを自由
にするために書かれたはずと考えなければ
なりません。でも、どこに恵みがあるのか、
このままではわかりません。

モーセの時代からイエスが来られた時
までのおよそ千五百年間、人々は安息日にな
ると会堂に集まりました。会堂に行かなければ
神の恵みに与えることはできない。人々はその
ように信じていました。それは決して間違っ
ていたわけではありません。旧約聖書にはそ
れなりの根拠が書かれていたのです。

でもイエスはどうされたか。会堂を出られ
たのは、まだ日没には早い時間でしたから安
息日はまだ終わっていません。その安息日に、
会堂の外で、つまりシモンの家で何か起きた
か。シモンのしゅうとがひどい熱で苦しんで
いたのを、イエスは熱をわかりつけ、しゅう
とをいやされました。

単純にシモンのしゅうとの病気が治った
という意味ではありません。イエスは新しい
ことを示しておられるのです。それまでは、
安息日の恵みは会堂の中にしかなかった。病
気の者や障害のある者、いろいろな事情を抱
えて会堂に行けなかった者は、安息日の恵み
に与ることができない。それが旧約の時代で
した。けれども、今どうなりましたか。イエ
スは会堂の外に出られ、会堂に行けなかった
者のところに向き、病をいやし、健康を取
り戻させ、その家にいた人たちとともに喜ば
うとされる。

38 節「イエスは立ち上がって会堂を出て、
シモンの家に入られた。」 安息日の恵みは

会堂の中にだけあるのではない。今や、会堂
の外にもあふれ出している。イエスはそのこ
とをお示しになりました。

(2) 日が暮れると

次に 40 節を見ます。冒頭に「日が暮れる
と」とあります。ここも、ルカが事実として
記録にとどめるために書いた、そんなふう
に読み飛ばしてしまうかも知れません。何度
も言います。意味のないことばは聖書には
ない。「日が暮れると」の中にも、大きな
恵みがあるのです。どんな恵みでしょう。
安息日は金曜日の日没から始まって、土
曜日の日没までです。日が暮れたと言
うことは、人々が考えていた安息日の
規定が終わったということになります。

「日が暮れると、いろいろな病気で弱
っている者を抱えた人たちがみな、その
病人をみもとに連れてやって来た。イエ
スは、ひとりひとりに手を置いて、い
やされた。」

日が暮れたら、電気も灯りもありません。
月がなければ真っ暗です。それなのにど
うして人々は夜の暗い中でやって来る
のか。一つには、安息日の規定があ
ったからでした。安息日は働いては
ならない、このみことばを杓子定規
にとらえ、この日は何メートル以上歩
いてはならない。そんなふうに律法
学者は人々を指導していました。だ
から安息日は旅行できない。それが
一つ目の理由。

もう一つは、病気や障害を抱えた者
がいる家族たちつらさもあつたのだら
うと考えられます。病気の者、障害
者が家族の中に入れば、いろいろな意
味で差別されました。汚らしい者
を見るような視線でさらされてきた。
それがいやで、わざわざ夜になって
からイエスのところに来た。そんな
事情もあつた

でしょう。

そんな思いで連れて来られた人たちにイエスは手を触れられ、ひとりひとりをいやされました。イエスは何をお示しになろうとしていますか。先ほどは、会堂の中ではなく、会堂の外にも神の恵みは及ぶことを示そうとされていました。今イエスはここで、神の恵みは安息日だけではない、安息日が終わっても変わることなく注がれることを示そうとされています。

今日の箇所ではまず、安息日に、会堂の中で、悪霊が追い出されました。41節でも悪霊が追い出されています。もう安息日は終わっています。会堂中ではありません。会堂の外です。安息日であろうがなかろうが、会堂中であろうが外であろうが、イエスはまったく同じように働かれ、恵みを注いでくださる。そのことが見えてきます。

「安息日を守れ」というような不自由さはもうどこにもありません。安息日の恵みは、神の側から私たちのほうにあふれるばかりに注がれているからです。

4 イエスの権威と力

イエスは権威と力をもって悪霊をしっかりとつけ、悪霊を追い出しました。シモンのしゅうとの熱をしっかりとつけ、熱をいやされます。どちらも、「しっかりとつける」と言うことばで表されています。なんだか非常に厳しい表情を連想し、近寄りたくない印象をもってしまいます。でも、いったいイエスはどのような思いを秘めながらこうしておられたのか、最後に考えておきたいと思います。

悪霊が追い出される、病がいやされていく。私たちの目にはそんな奇蹟の場面にしか見えません。でも、イエスは悪霊を追い出さ

ながら、病をいやしながら、ひとりひとりの罪をお赦しになられていることを決して忘れてはなりません。

人の罪を赦す。この方は、神なのだから簡単にできる。そんなふうにするのでしょうか。そうではありません。この方が人の罪を赦されるということは、別の言い方をすれば、この方が私たちの罪を引き取り、この方が代わって罪のさばきを受けることを意味します。それをひとりひとり、丁寧に接しながら、しておられる。「あなたの罪をよこさない。わたしが背負います。あなたの罪も私に渡しなさい。わたしがすべて背負うから。」

もちろんイエスは、そのようなことはひとことも口にしません。けれども、私たちは覚えたいと思います。この方は黙って、ひとことも口にすることなく、私たちに恩着せるようなこともなさらず、私たちの気がつかない所で、私たちのためにいのちを捨ててくださろうとしていた。

悪霊にさえ「黙れ」と命じました。なぜだろうと不思議でした。この方は、ご自分がしていることを、私たちに知られないようにと配慮してくださっているのです。

人々は、イエスが語ったみことばに権威と力があると驚きました。でもイエスの心の中にあることまでは、気がつかないままです。

ですから私たちは、語られていないイエスの心の内に目を留めたいと思います。この方のうちから私たちにに向けて、どれほどの恵みがあふれていたのかを覚えて、御名をあがめたいと願います。